

# 韓国人学習者による日本語の授受補助動詞習得 —学習環境と日本語能力が及ぼす影響を中心に—

尹 喜貞

## 1. はじめに

恩恵の授受を表す日本語と韓国語の授受補助動詞の体系は以下のように異なる。

### <日本語>

与え手—主格 受け手—与格 てあげる  
視点

与え手—主格 受け手—与格 てくれる  
視点

受け手—主格 与え手—与格 してもらう  
視点

### <韓国語>

与え手—主格 受け手—与格 어・아 주다  
(ə・a j u d a)

従って、韓国語を母語とする韓国人学習者は日本語の授受補助動詞を習得するために韓国語の一つの形式を日本語の三つの形式に使い分けなければならない。

では、韓国人学習者は授受方向ごとにどのように授受補助動詞を使い分けしているか。誤用の形態にはどのようなものが見られるか。また、これらは学習環境によって異なるか。

本研究では、学習環境(JFL: Japanese as a Foreign Language, JSL: Japanese as a Second Language)が異なる韓国人学習者を対象に授受補助動詞の習得状況を日本語能力別に検討したい。

## 2. 先行研究

### 授受補助動詞に学習環境が及ぼす影響

田中(1997、1999): 英語話者の文産出テスト(筆記)を用いて話者が受け手の場合に使われる受益動詞「てくれる」「てもらう」の習得状況を調査。結果として受益動詞は学習環境に影響されないと報告。

→英語話者以外の母語話者の場合はまだ明らかにさ

れていない。

### 授受補助動詞の習得順序

大塚(1995)、坂本・岡田(1996)、岡田(1996、1997): 「てあげる」「てもらう」> 「てくれる」(口頭データ、空欄補充形式テスト、作文資料による結果)。田中(1997、1999)、稲熊(2004): 「てくれる」> 「てもらう」(文産出テスト、多肢選択テストによる結果)

→授受補助動詞の習得順序に関して未だ一致した見解や結果の違いに起因した要因など明らかにされていない点が多い。

### 誤用の型

坂本・岡田(1996): 日本語学習者(主に英語話者、中国語話者)を対象に空欄補充形式テストを実施。誤用の型は学習者の日本語能力、母語によって異なり、特に英語話者に多様な誤用の型が見られる。日本語能力が低いレベルで「(て)あげる」と「(て)くれる」との混同が多いことを報告。

→本研究では日本語学習者に授受補助動詞文を作ってもらったデータを用いて次のような誤用の枠組に従い、学習者の授受補助動詞文産出における問題点を探る。

表 1 本研究における誤用分析の枠組

命名	意味	視点
意味論的誤り	×	○
語用論的誤り	○	×
複合的誤り	×	×

つまり、本研究では授受補助動詞文の中で授受の方向が正しくないものと授受の方向は正しいが、視点のおき方が間違っているものを誤用分析の枠組とし、分析を行う。また、先行研究を踏まえて次のような研究課題を設けた。

- 1) 授受方向における授受補助動詞の正用率は学習環境と日本語能力によって異なるか。
- 2) 正用文における「てくれる」「てもらう」の

使用比率は学習環境と日本語能力によって異なるか。

- 3) 誤用の類型(意味論的誤り・語用論的誤り・複合的誤り)の使用比率は学習環境と日本語能力によって異なるか。
- 4) 各類型における誤用パターンの使用比率は学習環境と日本語能力によって異なるか。

### 3. 調査概要

**被験者：**韓国人学習者(JFL・JSL)を対象に SPOT(Simple Performance-Oriented Test)を用いて上位群・下位群にわけた。

表2 被験者

	JFL(177名)	JSL(61名)
上位群	84名	40名
下位群	93名	21名

**調査資料：**絵をみて授受補助動詞文を作る(筆記)文産出テスト(図1)。問題数は授受方向ごとに4題で全8題であり、問題の説明には韓国語訳を付けた。

問題① 指定単語：<sup>にもつ</sup>荷物、<sup>もつ</sup>持つ

答え⇒

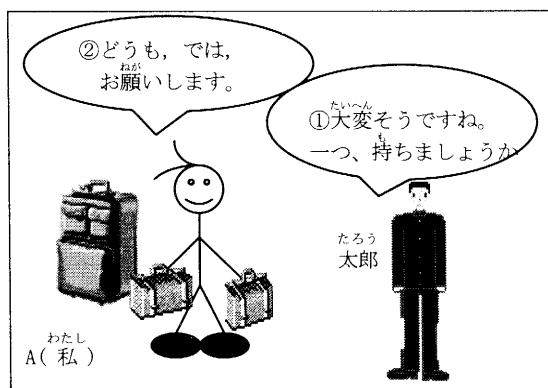


図1 文産出テスト

**分析資料：**学習者に筆記で作ってもらったそれぞれの正用文と誤用文の数を授受方向ごとに集計。得点範囲は0～4となる。

**分析方法：**2要因分散分析(被験者間：学習環境(2)・日本語能力(2))と3要因分散分析(被験者間：学習環境(2)・日本語能力(2)、被験者内：使用割合を比較したい項目)

### 4. 結果と考察

#### 4.1 研究課題1の結果と考察

図2は、恩恵の授受方向別の正用率である。ただし、受益動詞の正用率は「てくれる」「てもらう」両方の正用を含んでいる。統計処理は学習環境(2)×日本語能力(2)の2要因分散分析を用いた。

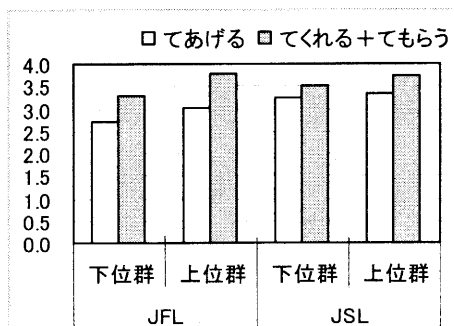


図2 授受方向別の正用率

**恩恵の授受方向が「話者→他者」の場合：**

- ・学習環境の主効果あり  $F(1, 234)=4.73, p<.05$
- ・日本語能力の主効果なし
- ・交互作用なし

⇒「てあげる」の正用率は日本語能力に関わらず、JSL学習者のほうがJFL学習者より高い。このことから、「てあげる」の習得はJSL環境のほうがJFL環境より早いといえる。つまり、「てあげる」の習得は学習環境に影響され、JSL環境のほうがJFL環境より促進されやすいと考えられる。

**恩恵の授受方向が「他者→話者」の場合：**

- ・日本語能力の主効果あり  $F(1, 234)=7.27, p<.05$
- ・学習環境の主効果なし
- ・交互作用なし

⇒受益動詞の選択を考慮しない場合、受益動詞の全体の正用率は学習環境に関わらず上位群のほうが下位群より高い。このことから、学習者が受け手の場合に授受の意味を正しく伝える能力は日本語能力に影響されると考えられる。

#### 4.2 研究課題2の結果と考察

図3は、恩恵の授受方向が「他者→話者」の場合、正用文における受益動詞「てくれる」「てもらう」の使用率である。

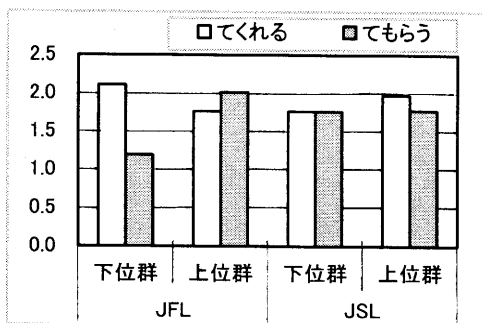


図3 「てくれる」「てもらう」の使用率

統計処理は(学習環境(2)と日本語能力(2)を被験者要因、受益動詞(2)を被験者内とする 3 要因分散分析を用いた。

- ・ 3 要因間に交互作用あり  $F(1, 234)=3.26, .05 < p < .10$
- ・ JFL 下位群だけが受益動詞間に差あり  $F(1, 184)=22.37, p < .01$

➡受益動詞「てくれる」「てもらう」の選択の傾向は、JFL 学習者の場合、学習初期「てくれる」のほうが「てもらう」より多く使われる。しかし、日本語能力の上昇とともに、「てもらう」の使用も多くなる。このことから、学習初期の JFL 学習者にとって与え手を主語とする「てくれる」のほうが受け手を主語とする「てもらう」より使いやすいと考えられるが、それは韓国語に与え手を主語とする受益動詞文しかないことに起因したと考えられる。また、同じ日本語能力が低いレベルでも JFL 環境のほうが JSL 環境より受益動詞の選択において母語に影響されやすいと考えられる。

#### 4.3 研究課題3の結果と考察

図4は、誤用の類型別の割合である。

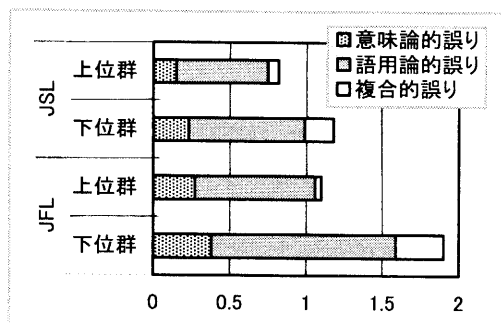


図4 誤用の種類別の割合

統計処理は 3 要因分散分析—被験者間：学習環境(2)・日本語能力(2)、被験者内：誤用の類型(3)

- ・ 誤用類型の主効果あり  $F(2, 468)=32.12, p < .01$

(語用論的誤り > 意味論的誤り・語用論的誤り、 $MSe=39.07, p < .01$ )

- ・ 学習環境の主効果あり  $F(1, 234)=4.63, p < .05$
- ・ 日本語能力の主効果あり  $F(1, 234)=6.02, p < .05$
- ・ 交互作用なし

➡授受補助動詞文における韓国人学習者の誤りには授受の意味が逆になってしまうパターンより授受の意味は合っているが視点のおき方が誤ったパターンが多い。これは、韓国語に視点という概念がないことに起因し、かつ韓国人学習者の授受補助動詞の習得は視点の習得に大きく影響されると考えられる。

#### 4.4 研究課題4の結果と考察

3 要因分散分析—被験者間：学習環境(2)・日本語能力(2)、被験者内：誤用類型別の誤用パターン(3)

##### 意味論的誤り

各要因の主効果なし

交互作用なし

##### 語用論的誤り(図5)

- ・ 誤用パターンの主効果あり  $F(2, 468)=6.49, p < .01$ (私が～てくれる(話者→他者) > 他者が～てもらう(話者→他者) > 他者が～てあげる(他者→話者)、 $MSe=5.72, p < .01$ )
- ・ 学習環境の主効果あり  $F(1, 234)=2.91, .05 < p < .10$
- ・ 日本語能力の主効果なし
- ・ 交互作用なし

##### 複合的誤り(図6)

- ・ 日本語能力の主効果あり  $F(1, 234)=5.55, p < .05$
- ・ 学習環境、誤用パターンの主効果なし
- ・ 交互作用なし

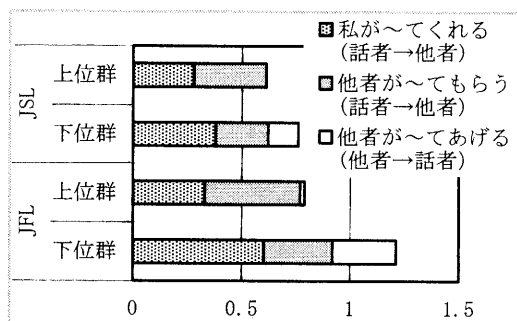


図5 語用論的誤りのパターンの割合

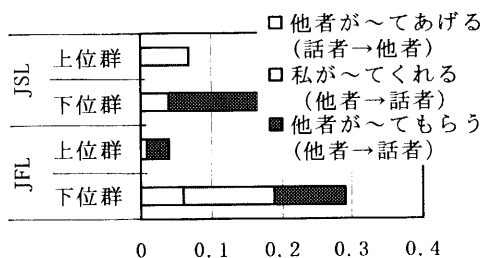


図6 複合的誤りのパターンの割合

➡以上のことから、視点による誤りパターンの中でも話者が与え手の場合の誤用が多いことがわかった。また、これまで「てあげる」と「てくれる」との混同と言われる誤りは「てあげる」を「てくれる」とする誤りのほうが「てくれる」を「てあげる」とする誤りより多いといえる。また、もともと全体の誤用率が低かった意味論的誤りと複合的誤りは主な誤用パターンは見られなかったが、本調査の結果から、複合的誤りは日本語能力の上昇とともに少なくなることがわかった。

## 5. 結論

1. 「てあげる」の習得は JSL 学習者のほうが JFL 学習者より早く進む。
2. 話者が受け手の場合に受益動詞を用いた意味伝達能力は学習環境に関わらず日本語能力の上昇とともに上達する。
3. 日本語能力が低い JFL 学習者は受益動詞「てくれる」と「てもらう」の中で「てくれる」を多く使う傾向があるが、日本語能力の上昇とともに「てもらう」の使用も多くなる。しかし、JSL 学習者に主な受益動詞は見られなかった。
4. 韓国人学習者の誤用は主に視点のおき方に起因したものが多く。中でも話者が与え手の場合に視点のおき方が誤っている「てくれる」「てもらう」の使用が多くみられた。
5. 学習者は授受の意味が伝えられる誤用パターンに関して誤用意識が低い可能性がある。

## 6. 今後の課題

1. 学習環境の影響を教材や教授法から検討
2. 他の母語話者の場合との比較
3. 話者が授受行為に参加しない場合を調査
4. 口頭データや作文などの様々な調査資料の収集

## 参考文献

- 稲熊美保 (2004) 「韓国人日本語学習者の授受表現の習得について—「もらう」系と「くれる」系を中心に」『国際開発研究フォーラム』26, 13-26.
- 大塚純子 (1995) 「中上級日本語学習者の視点表現の発達について—立場志向文を中心に」『言語文化と日本語教育』9, 281-292.
- 岡田久美 (1996) 「授受構文習得における問題点について」『第7回第二言語習得研究会全国大会 京都外国語大学』
- 岡田久美 (1997) 「授受動詞の使用状況の分析—視点表現における問題点の考察」『平成9年度日本語教育学会春季大会予稿集』81-86.
- 坂本正・岡田久美 (1996) 「日本語の授受動詞の習得について」『アカデミア—文学・語学編—』61, 南山大学 157-202.
- 田中真理 (1997) 「日本語学習者の視点・ヴォイスの習得—「受益文」と「視点の統一」を中心に」『視点・ヴォイスに関する習得研究—学習環境と contextual variability を中心に—』平成8~9年度科学研究費補助金研究成果報告書 21-52.
- 田中真理 (1999) 「文生成テストにおける日本語ヴォイスの習得研究 L1 別分析」『視点・ヴォイスに関する習得研究—学習環境と contextual variability を中心に—』平成8~9年度科学研究費補助金研究成果報告書 95-114.
- 林八龍 (1980) 「日本語・韓国語の授受表現の対照研究」『日本語教育』40.
- 堀口純子 (1983) 「授受表現にかかわる誤りの分析」『日本語教育』52, 91-103.
- 宮地裕 (1965) 「「やる・くれる・もらう」を述語とする文の構造について」『国語学』63.
- 山田敏弘 (2004) 『日本語のベネファクティブ—「てやる」「てくれる」「てもらう」の文法』明治書院